



テストは何を測るのか

項目反応理論の考え方

光永 悠彦 (著)

(ナカニシヤ出版 ISBN-13: 978-4779510717)

【評者】村木 英治
(東北大学 名誉教授)



これはやさしい本である。項目反応理論の初学者のために「易しく」書かれた入門書という意味ではなく、「優しく」我々にテストと云う道具についての認識を深めてくれる啓蒙書であるということである。その理由のひとつに数式が少ないことがある。古典的テスト理論の基本式である $X=T+E$ が第3章でやっと現れる。その後の数式の表示は必須なものだけに限っているようである。そして著者は数式に頼ることなく、テストについての概念を優しく説明しようとしている。これはこの著者の明らかに意志的な選択であり、この選択のおかげで本著がテスト理論の啓蒙書でありえ、同時に学習評価の専門書としてユニークで意義深い貢献となり得ている。

著者は「はじめに」でテストの近未来像を描いた後、こう述べる：

本書で詳述する項目反応理論の考え方に接することを通じ、深い根拠を考えずに既存の試験制度を変えようとするのではなく、より多くの視点から試験制度のあり方について考える必要があると感じるかもしれません。もしそうなれば、筆者(光永)としてのうれしく思います。

新しい試験制度を正しく受け入れるためにはそれについての理解が必要である。特にそれらの新しいサービスを受容し活用していく教師などの学校関係者はもちろんそのサービスの直接の消費者であるところの被験者である学生、そして彼らの保護者にとってそのような試験についての知識は不可欠である。私はアメリカで10年余ETSの研究機関に在籍していた。ETSでは信頼性、妥当性、標準化、CBTなどのテスト用語についてまとめた小冊子を発行している。それは全米の教育機関や一般家庭にも配布される。ETSのPublic Relation(PR)を担う事業の大切なひとつである。日本においては同様な役目を果たして欲しいと2010年に日本テスト学会編で池田央、柴山直、植野真臣、倉元直樹、野口裕之、平井洋子、&村木英治著の「見直そう、テストを支える基本の技術と教育」が金子書房から発行されたが、その更なる普及とともに光永氏のこの「テストは何を測るのか 項目反応理論の考え方」も日本テスト学会の活動を通してそのようなPRにぜひ役立てて欲しいと思っている。

啓蒙書としての本著の高い評価とともに、テスト専門家、研究者の専門書、あるいは大学の専門課程における教科書としての役割についても私の評価はそれに劣らない。本著の目次を見てみよう。

はじめに

- 第1章 理論編 I: 試験という「道具」を理解する
- 第2章 実践例紹介: 共通語学試験の開発
- 第3章 理論編 II: 数理モデルに基づくテスト理論
- 第4章 実践編: 試験実施のための諸手法
- 第5章 発展編: これからの試験開発に向けて
- 第6章 Rを用いたIRT分析: lazy.irt

数式の多用やそのレベルを抑えた理論編は、これまでの微分・積分・行列などの数学で重くなったIRT入り口のドアを学生たちにこじ開けさせる無理強いする必要もなく、彼らをテスト論のコアに連れて行くことができる。本著が例えば教員養成のコースに非常に適したテキストである所以である。しかも内容は決して入門のレベルに留まっていない。「日本的テスト文化」に対する批判のコラムを含めて著者の論調は熱く示唆的である。高い専門性に自然に我々を到達させてくれる。しかし本著の真骨頂は第2章と第4章の実践編にある。どちらも質の高い新しいテスト作成にチャレンジしたいと思っているテストビジネスあるいは研究組織の専門家にとって、他の専門書では決して学ぶことができない充実した実践例である。テストのデザイン、テスト冊子の作成、実施とそのテストデータの因子分析も含めた分析手法の広範な応用を経験してきた著者だから展開できたテスト実務についての充実した実践記録である。理論編で著者と一緒にテストという「道具」について深く考えさせられた私は、実践編でその具体的でリアルな試験実務の詳細な著述に圧倒された。そして最終章は誰でもアクセスが可能なIRTを使ったIRT体験への招待が用意されている。著者は読者を最後まで大切にしている。

日本テスト学会の会員の皆さんはきっとテストが好きなのだろう。でも私はテストを受けることは嫌いである。しかしそのテストの質を高めることは私の使命だと思っている。その意味では私も他の会員と同じくテストが好きなのだろう。本書は光永君の単書のデビュー作だそうである。この専門書の「優しさ」は彼のテスト学に対する愛情と使命感の成果だと思っている。

